

平成二十九年 十月編入学 大学院人文科学府博士後期課程入学試験問題

(東洋史学・外国人留学生入試)

次の各問に答えなさい。(解答は解答紙に記入)

問 I 日本近世の対外体制を、「鎖国」ではなく、「海禁」と規定する見解について、その論拠と学説史的意義を説明し、あわせて中国史の立場からみた、その問題点についてのべなさい。

問 II 次の各語について、簡明に説明しなさい。

- ① 欽天監
- ② 駐蔵大臣
- ③ 緑營
- ④ 乍浦
- ⑤ 尚之信
- ⑥ George Macartney
- ⑦ 箭内健次
- ⑧ 『瀛環志略』

問Ⅲ 次の史料を現代日本語に訳しなさい（解答の字体は常用漢字でも可）。

諭軍機大臣等。「據陳大受奏、『蘇祿國遣番官齎表謝恩。摺內稱馬燦・陳榮、均係內地船戶水手。於乾隆五年。前往蘇祿。即於乾隆七年、馬燦更名馬光明。充為貢使。陳榮更名陳朝盛、充為通事入貢。而此次馬光明復齎表謝恩。若輩影射滋事之處。內地似宜量為裁制』等語。定例、商人往外洋諸番貿易、遲至三年以外始歸者。將商人舵水人等、勒還原籍、永遠不許復出外洋。例禁甚嚴。今馬燦等、乃潛住蘇祿、往來內地。不但如陳大受所稱影射滋事等弊、且以內地民人、為外番充作貢使、尤有關於國體。可傳諭陳大受、令其知情事之輕重、留心籌辦。仍將辦理之處、具摺奏聞」。

尋覆奏、「蘇祿國原咨搬搶銀貨一案。查明馬光明向在呂宋、逋欠番債、曾累番目黃佔代賠。遂在蘇祿齎充貢使、圖至內地避債、兼得乘機索詐。至乾隆九年內、蘇祿貢船回國、阻風呂宋地方。黃佔回明該國王、將船中貨物、扣留抵欠。并訪聞馬光明在呂宋・蘇祿、生事之處甚多、應逐細根究。至該犯、稔知定例不許在洋逗遛。二三年內、必絡繹來往、尤宜杜其根株。現密飭廈門地方官、遴選熟習番語之人。作為通事、伴送該番回國。並令布政使高山咨明該國王、告以馬光明・陳朝盛、近因在內地犯事留審、與該國無涉。似為妥便」。得旨。「如此辦理。甚妥。馬光明當重處以示警」。

（『高宗純皇帝實錄』卷二百八十二、乾隆十二年正月十日）